

さまざまな経験やそのときどきの想いを糧に築きあげて昨日より今日、今日より明日の人生を充実させている、川村沙織さんの生き方を紹介します。

「ここに来れば心がまんまる」そんな場所をつくりたい！



【Profile】八戸市出身。大学卒業後、社会福祉士として高齢者施設に10年間勤務。出産、育児のため退職後、スクールソーシャルワーカーとして西北管内の高校等に勤務中。2018年に立ち上げたボランティア団体「チームなないろ」の代表を務める。

誰でも参加できる 居心地の良い場所づくり

梅雨の中休みを思わせる快晴に恵まれた7月25日、五所川原市の専念寺に子どもたちの笑い声があふれていました。毎月1回、地域の親子などが昼食を食べながら交流する「憩いの広場ここまる」が開催されました。主催者のボランティア団体「チームなないろ」の代表・川村沙織さんは、「新型コロナウイルスの影響で、先月の活動が中止になりましたが、みんな待ち望んでいたでしょう。感染症対策の課題は残りましたが、予定の2倍近い80人が集まってくれて大成功です」と声を弾ませます。

去年は流しそうめんが好評でしたが、今年は新型コロナウイルス対策で個別の井に小分けしたそうめんを提供。アクセサリー作りのワークショップやお菓子のくじ引き、ミニトマトの詰め放題、屋外には小型プールなどの水遊びコーナーも設けられ、親子揃って楽しめる工夫が凝らされていました。

川村さんは、地域の仲間4人と共に2018

年に「チームなないろ」を立ち上げました。無料で食事を提供する「子ども食堂」など、地域の居場所づくりを目指して活動を展開しています。基本的には毎月第4土曜日に市内のコミュニティセンターを会場にして開催。高校生以下と65歳以上は無料、大人は食材費として300円で昼食が食べられます。「子どもだけでも、親子でも、ひとりでも、高齢者でも、障がいがある人でも、誰でも参加できる、居心地の良い場所」がモットーになっています。

自身の体験と仲間との出会いが 活動への一歩

川村さんが、この取組を始めたのは自身の子育ての悩みがきっかけでした。2児の母親でもある川村さんは、「結婚して八戸市からつがる市に移り住んで、頼れる人もなく、子育てのことを周囲に相談できませんでした。下の息子に障がいがあり、何でも一人で抱え込んでしまっていたのかもしれない」と語りました。勤務していた高齢者施設も子育てとの両立が難しく、退職。八戸市とつがる市、距離が離れているため、「自分の親を頼りたくても頼れない。子どもを連れて外に出るのも、常に人目が気になっていました」。

そんな時、「自分で楽しめる自分の居場所をつくらう」と心に決めました。活動を共にする男女4人のメンバーとの出会いも、踏み出す大きな力となりました。メンバーそれぞれが保育士、カウンセラー、社会福祉士、傾聴の資格などを持っていて、「4人がそれぞれの特技を活かして子育てなどの相談に乗れるのも私たちの強みです」と川村さんは言います。

川村さんの本業はスクールソーシャルワーカーで、西北五地域の高校を担当しています。大学で福祉を学び、福祉の現場経験を活かし、再就職につながりました。

「勤務は毎日ではないので、ボランティア活動とのバランスはとれています。それに高齢者福祉施設に勤めている夫の理解も欠かせません」夫は「大変でない範囲で無理なく続けてね」と川村さんたちの活動を応援してくれています。

これからのビジョン

「チームなないろ」は、今年5月、新型コロナウイルスの影響による小中学校の臨時休校で給食がなくなったため、子どもの食費がかさんでいる家庭の手助けをしようと、野菜や果物など食料の無料配布を実施しました。

これからの目標は、月1回の「ここまる」を平日の毎日、夕方に開催すること。「いきなりは無理でも、せめて毎週土曜日の開催に増やしたい。月1回だと単なるイベントになってしまう。子育て、家事は毎日が勝負ですから」と力説します。

そのために必要なのは、資金、人材、場所の3要素。現在、助成金や個人・企業からの物品の寄贈で運営しているのを、もっと幅広い企業などから資金を集める必要があります。また、高校生などボランティアの継続的な協力や、空き家など定期的に開催できる会場の確保が課題となっています。

さらに、会場を子どもたちと地域の高齢者が交流する場にもしたいというのが強い願いです。川村さんの子どもの頃、両親が仕事で忙しく「じいちゃん、ばあちゃん子」として育った経験が原点になっています。交流の居場所を「憩いの広場ここまる」と名付けた理由、それは「ここに来ると、お腹も心も満たされ真ん丸笑顔になれるように願いを込めました」。「ここがあつてよかった」と一人でも多くの方に思ってもらえるよう川村さんの活動は続きます。

(取材：千田 哲史)